

「底が突き抜けた」時代の歩き方 344

日本人拉致事件を惹き起こした北朝鮮民族主義の冷戦的思考の病

島田雅彦は日本人拉致事件について、「金正日の妄執」といい、「おそるべきアナクロニズム」と指摘しているが、同じ作家の関川夏央はその「妄執」ないし「アナクロニズム」について、『中央公論』(02.5)で、「北朝鮮はコリア文化に、東西冷戦という条件下に金日成という要素を加えて成立したのである。コリアという独特な風土の上に成長した独特な民族主義が超閉鎖空間で異常な自己増殖をとげ、ついに空想的侵略主義に至ったものである。」と説明している。《同一民族はすべての同盟国に優先する、とか、コリアはひとつだ》と韓国が民族主義を標榜しつづけるのであれば、《北朝鮮の犯罪は民族の犯罪である。北朝鮮の病は韓国の病である。》とまでいきり、北朝鮮にみられる《過剰防衛型民族主義または自民族中心主義段階までなら、韓国もおなじではないか》という。

関川夏央は、《金大中大統領はノーベル平和賞を受賞しながら、北朝鮮の軍事独裁体制や対外テロ行為の継続、北朝鮮国内における人権侵害というより人間破壊ともいうべき行為には口を閉ざしつづけている》ことの韓国の道義的責任を問うているのだ。《少なくとも、北朝鮮を「わがことのように恥じ、憂う」センスなしの民族主義などあり得ない。同一民族が戦争状態でもないのに継続的に大量栄養失調死をとげ、大量の飢餓亡命者を出しつづけるような状態を放置する民族主義など、いうも愚かである。北朝鮮と北朝鮮人の現状を放置し、忘れていたいのなら、民族主義を捨てればよい。／だいたい、国内に「在日」のような「在韓外国人」集団を持たず、単一民族の同質性というところに不用意に安住しているから、現代でも民族主義を呑気に呼号していられるのである。病としての民族主義の相対化が強くもとめられる。》として、彼は韓国の「歴史認識」と「歴史への責任」にまで踏み込むべきだと主張する。

韓国に対して「病としての民族主義の相対化」を強く求める関川夏央は他方で、「よど号」グループの元妻の八尾恵が証人として出廷した今年3月12日の東京地裁で、83年当時23歳で英国留学中であった有本恵子さんを騙して北朝鮮に拉致したことを明らかにしたことに、日本人が示した反応についてこう訳す。

《私がこのたびの報道でもっとも驚いたことは、日本人がこの証言に驚いたということである。北朝鮮が拉致などのテロを平気で行なう国であることはもはや常識となっていると私は思っていた。また有本さん事件は、すでに91年はじめから『週刊文春』誌上で、スペインを舞台に80年に実行された男性ふたりの誘拐とともに仔細に報じられていたから、日本のおおかたの反応は「やはり」であって「まさか」ではないと考えてい

たのである。

ところが驚きの声上がる。ということは、これまでの拉致事件も、政府が北朝鮮の犯行と認定したにもかかわらず、日本人は半信半疑とはいわぬまでも、まだ20パーセント程度の疑念を抱いていたらしいと知った。常識ではとうていはかりがたい行為であるから無理もないが、北朝鮮を、国家ではなく団体である、あるいは巨大なカルトであると考えればわかりやすいかと思う。常識がいちおう通用する日本社会もオウム真理教という異物を胚胎した。まして絶対に脱会を許さないカルトが閉鎖空間の中で「革命妄想」と「民族主義」を煮つめればどうなるか。》

日本人の多くが北朝鮮の指導下で日本人拉致が実行されていたことを八尾証言で知って驚いたのは、「常識ではとうていはかりがたい行為であ」ったからだ。もしそれが事実であったなら、「結局のところ北朝鮮は何のために日本人を拉致したのか？」という肝心な点が、日本人には全くみえてこないのである。その動機が一向につかめないから、日本人が拉致されていたことがわかって、そして北朝鮮はなんと非道い国だと憤っても、たぶん多くの日本人が振り上げる拳がどこか宙に浮いている感じだと思われる。手間暇かけてリスクを冒してまで日本人を拉致したのだから、拉致被害者が北朝鮮の国益に叶うような重要な任務と役割を負わされていたことは間違いない。それは現時点では謎であるが、彼らが北朝鮮でどのように取り扱われているかによって、彼らの負わされている任務がみえてくるかもしれない。

『週刊文春』(02・10・31)に、10人の日本人拉致被害者の日常生活についての証言が掲載されている。証言者は99年に北朝鮮から韓国へ亡命したソウル在住の南光植(46)で、《普通の亡命者と違うのは、彼の祖父が金日成率いた抗日パルチザンのメンバーで、父親がロシアや中国の大使まで務めた朝鮮労働党の最高幹部という点だ。》91年頃、北朝鮮の宮殿である「錦繡山^{しゅう}経理部」で金日成・正日一族のために食糧や日用品を調達する仕事をしていた彼は、朝鮮労働党高級幹部の子息しかねない文化事業指導員として派遣された、金一族のための特別の食品、カバン、手帳など日用品を製造している平壤市安山地区にある「ピョンチョン工場」の隣のビルに、拉致された日本人が生活している招待所があるのを発見する。日本人たちの世話係をしている友人の妻に聞くと、その内情は次のようなものであった。

「招待所にいる日本人は、全員が拉致されてきた人たちです。総勢10名で男性は一名だけ、あとは全員女性。年齢は40代半ばが中心です。食べ物も日用品もすべて日本と同じ物を配給していて、タオル、石鹸、シャンプーから薬に至るまで完全に日本製」で、日本での生活と同じ生活をさせているのは、「工作員養成機関で日本語を教える役目をさせている」からだ。日本語教育の内容については、「金正日政治軍事大学を卒業した工作員候補生のうち、優秀な者は平壤郊外にある労働党対外調査部第130連絡所という工作員養成所に派遣される。そこに秘密アジトがあって、安山招待所の日本人たちが日本語を教えている。/工作員と日本人は30坪ぐらいの狭い空間で一緒に模擬生活し、

日本語だけでなく日本人特有の動作や生活習慣、地理、環境などについて完璧に叩き込まれる。一人の作業員につき3～6カ月間の訓練を施し、完璧な`日本人`になりすまそうように育て上げる」

安山招待所での集団生活は拉致日本人たちの「日本的な性質」を維持するためであり、党幹部用の車で出かけて、買い物をしているときも普通の市民と接触しないように案内員が目を光らせており、《とにかく徹底的に隔離し、日本と変わりのない生活をさせて、作業員に日本人偽装のテクニックを叩き込む道具とする》。横田めぐみさん、市川修一さんらを目撃したと証言している元北朝鮮戦闘員・安明進（31）も安山招待所について、その女性たちは作業員教育のみならず、外国高官や労働党幹部の接待役も務めていたことを証言している。対南工作訓練の施設に通う道の途中に、日本人の集落が三つほど存在していたことや、その訓練施設についても語っている。

「平壤市郊外の山に掘り抜いたトンネルの中に、ソウルそっくりの地下都市が建設されているのです。高さ約3メートル、幅約8メートルのトンネルの中に、銀行、スーパーマーケット、ナイトクラブまで、ありとあらゆる施設のダミーがひしめいています。

地下都市の正式名称は『以南化環境館』といい、韓国から拉致した人々を作業員教育のために働かせて、ソウルと同じ環境を実現していた。言葉も韓国のアクセントで、韓国の紙幣で買い物などをする訓練を受けた。地下都市ができたのは89年頃ですが、韓国に渡った作業員が、北との違いに驚かないことを目的に建設されたと聞きました。当時はネオンサインを見ただけで腰を抜かしてしまう作業員がいたほどですから。

私は合計三回、最長で25日間、ここで教育を受けました。入り口から3キロの地点まで行きましたが、教官によると『総延長は10キロある』とのことでした。その時、80人ほどが地下都市にいたが、韓国人拉致被害者だとはっきりわかる人は約8人いました。」

《日本人拉致被害者には物質面で日本と同じ生活ができるよう、また韓国人拉致被害者には韓国のそれと同じ待遇が保障されていたという。》

南光植証言で注意を喚起されるのは、《北朝鮮は日本に対し、民間人拉致だけではなく、特殊部隊による攻撃・占領というシナリオまで用意し着々と準備を進めていた》という点である。73年に人民軍に入隊し、しばらく南北国境付近（DMZ）の民事行政警察を務めていた南氏は二年後の75年、日本の本土攻撃を目的とした金日成直属の特殊部隊である朝鮮労働党中央軍事委員会第525部隊に配属される。第525部隊が召集されたのは75年4月13日であり、《両江道金亨権郡平山里に6万の精鋭が集結し、機密保持のため周囲500里（日本の50里・約200キロ）は封鎖され、住民たちも立ち退かされた。そして午前10時、一機のヘリが草原に着陸し、機内から金日成將軍と人民武力部長ら4名の幹部が降り立ちました。

「ここは北海道の気候によく似ている。きたる日本攻撃・北海道占領のため、寒地訓練を行う」

金日成はそう宣言した後、525部隊訓練所長に李夏一中将（現在は党中央軍事部長）を任命しました。その場で一個旅団12000人という大規模な旅団が5個生まれ、第525部隊が発足したのです。

空挺部隊、遊撃部隊、化学部隊、砲撃部隊、偵察部隊などに分れ、私は第2旅団偵察小隊第一組副組長に任命されました。訓練の内容は非常にリアルで、とくに市街戦を重点的に教育されました。通信社の占領、公安施設の破壊、空港の爆破、政府要人の拉致……数え上げて行けばキリがないほどです。

冬にはスキーを履き、北海道占領のための実地訓練を積みました。私は偵察部隊だったので、無線通信技術、地形図の読み取り、各種車両の運転技術から部隊の誘導訓練までやりました。

今でも忘れられないのは生物化学兵器の使用訓練です。東京の市街地を舞台にした模擬戦闘訓練の中で、生物化学兵器を用いた窒息死を実際に見せるのです。北朝鮮は神経系の化学兵器を所有しており、細菌兵器も人民軍細菌研究所で開発を進めている。こうした兵器の扱い方を、種類別に詳しく教えられます。》

南氏は訓練の中で日本語の教育も受け、「ニッポンのヘイシシヨクン……」の後に続くのは、《我々は金日成將軍の兵士である、降伏すれば命は保証する、といった内容だったという。》父親の計らいで80年に除隊し、平壤演劇映画大学監督学部に入學し、卒業後は78年に香港で拉致された申相玉監督の下で助監督を務めたが、86年に申監督がウィーンでアメリカ大使館に駆け込んで以降、平壤演劇映画大学の教授をしながら青少年創作団監督を務め、父親の口利きで90年から先述の錦繡山經理部に移り、主体思想に疑問を感じて99年に亡命という経過を辿ってきている。

この南光植や安明進にとどまらず、通信でこれまで亡命者の証言の記事をいくつか紹介し、引用してきているが、もちろん、これらの証言のどこまで信用できるか、という問題はある。割り引かねばならない話も含まれているかもしれないが、私は基本的に信用しようと思っている。振り返れば、中学、高校時代の60年安保前後、スターリンの大粛清を告発する書物が出始めていたが、日本共産党シンパが多かった当時の教師たちはアメリカの謀略として聞き入れようとせず、私たち生徒も無視してきた。ソルジェニーツィンら作家の登場によって、漸くスターリン時代のソ連が想像を絶する収容所列島であることが白日の下に晒された。毛沢東が発動した文化大革命についても同様であった。その大混乱、大殺戮は日本では当初受け入れられなかったが、その渦中から命懸けで送られてくる惨状レポートが事実として受けとめられるようになるのはかなり後であった。今回の拉致問題で人々が注意を向け始めるのは、金正日が拉致の事実を認めた9月16日以降であったことを思い起こすだけでも十分であろう。

たとえば、拉致日本人たちを収容している招待所の存在はともかく、日本侵略を企てていたという先の証言などはあまりにも荒唐無稽すぎて笑ってしまうかもしれないが、荒唐無稽といえば日本人拉致事件など荒唐無稽の最たるものであろう。では、日本人に

偽装して実行された大韓航空機爆破事件はどうだろう、荒唐無稽ではなかったか。北朝鮮の荒唐無稽さは、50年6月から53年7月まで続いた朝鮮戦争にまで遡って考えられないだろうか。

まず朝鮮半島の分断は、次のようにして起こった。ヤルタ協定に基づいて45年8月8日、日本に宣戦布告したソ連が二週間あまり日本軍の各地の拠点を攻撃し、ついに8月24日、平壤にまで進駐した。平壤市民はソ連軍を歓迎し、ソウルでも祝賀行事の準備が進められるなか、追い詰められた日本軍は各地で工場や鉱山を破壊しながら撤退していた。しかし、ソ連の朝鮮全土占領を恐れるアメリカは8日前に38度線以北をソ連の分担とすることを提案し、朝鮮民族の尊重とアメリカへの配慮から性急な社会主義の押し付けを避けていたソ連も了承することによって、朝鮮半島はソ連とアメリカの影響下に置かれた北と南に分断されることになった。三年後の48年8月15日、アメリカの強力な後押しによって、独立運動家としての国内的基盤の皆無な李承晩を大統領とする大韓民国の樹立が南で宣言されると、北では9月9日にソ連の後押しで金日成が朝鮮民主主義人民共和国の成立を宣言し、分断が固定化されていった。

双方とも朝鮮半島全体を代表する政権を自称、武力で相手を打倒すると公言し、二年後の朝鮮戦争へと向かっていく。朝鮮戦争は50年6月25日、南北の北緯38度線で両国の軍隊が衝突したのを機に、北朝鮮軍が南下して韓国に宣戦布告するかたちで始まった。その背景として、前年の49年10月1日に毛沢東を主席とする中華人民共和国が成立したことによって朝鮮半島で北が優位に立ったことや、韓国各地でパルチザン闘争が展開され、前月の選挙で李承晩大統領の与党国民党が大敗するという情勢が考えられる。戦争勃発の報がアメリカに伝えられるや、トルーマン大統領は国連安全保障理事会の召集を要求し、ソ連が欠席する安保理で北朝鮮の行為を平和の破壊と断定して38度線以北への撤退要求を決議した。だが戦争は拡大の一途を辿り、三日後北朝鮮軍がソウルを占領したのに対してアメリカ軍が釜山に上陸し、7日には国連安保理が国連軍の編制を決議する。

国連軍には16カ国が参加、最高司令官に米極東司令官ダグラス・マッカーサーが任命され、米軍が主力となる。進撃を続ける北朝鮮軍は9月までに釜山・大邱^{だいきゅう}付近を除く韓国全域を制圧するが、米軍の参戦によって戦局は逆転し、9月15日に国連軍が仁川^{じんせん}上陸作戦を敢行、26日にソウルを奪回する。更にアメリカは当初の目的を逸脱して38度線以北への侵攻を続け、10月には国連軍が中国国境の鴨緑江^{おうりょく}付近に到達したために10月25日、中国人民義勇軍が初めて韓国軍と戦火を交える。戦争は三年間にもわたり、被害は韓国発表の南側軍民の死亡者だけでも50万人にのぼるが、正確な数は不明である。前進基地となった日本では時ならぬ「特需景気」に湧いたことを忘れてはならない。

朝鮮戦争にはどちらが先に発砲したのかなど、不明な点が多いが、ロシア大統領文書館（旧・ソ連共産党中央委員会政治局資料館）が所蔵する最高機密公文書をもとに書か

れた『朝鮮戦争の謎と真実』（草思社刊）が、《未公開だったソ連側の内部資料を駆使して、朝鮮戦争の知られざる真相を浮き彫りにして》おり、モスクワ、平壤、北京の三都市を激しく行き交った暗号電報の解読記録を元に構成された前書から、『週刊文春』（01.11.29）の記事が、『スターリンが南進に消極的だった事実と金日成の見通しの甘さ』を簡潔に要約して紹介している。

47年5月12日 スターリン→在北朝鮮ソ連代表部

〔われわれは朝鮮問題に深く入り込む必要はない。〕

49年8月12日 金日成→モスクワ

〔平和的な再統一に関して……ソウルは提案を拒否している（略）。したがって北側には、南側への侵攻準備を開始する以外の選択はないのである。南進は、疑いもなく、南側における李承晩体制に反対する大規模蜂起を喚起するだろう。〕

もしわれわれが進攻を開始しなければ、朝鮮人民はこれを理解できない。われわれは朝鮮人民の信頼と支持を失うばかりか、祖国を統一する歴史的チャンスまで逃してしまう。いつも朝鮮人民の側に立ち、われわれを援助してくださる同志スターリンは、もちろんわれわれの気持ちを理解してくれると思う。〕

49年9月3日 在平壤ソ連臨時代理大使→モスクワ

〔金日成は、南朝鮮を二週間、最長でも二カ月間で占領できる状況にあるという自信を持っている。〕

50年4月 スターリン・金日成会談（於モスクワ）

〔スターリンは、ワシントンが戦いに介入することはないと絶対的に確信できなくてはいけない、と指摘した。さらに重要な条件は、朝鮮における解放闘争への北京の支持である。〕

金日成は、米国はソ連と中国が同盟する姿を前にして、あえて大戦争に介入する危険は冒さないだろうという意見を述べた。（略）

金日成は、（略）南朝鮮当局に対する蜂起では20万名もの党員が参加する、とソ連の指導者に保証した。〕

50年5月 毛沢東・金日成会談（於北京）

〔毛沢東は、金日成に、日本軍がこの紛争に介入するかどうかについて関心を示した。〕

金日成は、その可能性は少ないとしたものの、それでもやはり、米国側が2万～3万名の日本兵を送ることはありうると述べた。（略）

周恩来の説明によれば、『毛沢東は日本軍の存在が紛争を長期化させるのではないかと警告したようだ。』（註 - この時期、`日本軍`は存在しなかった。保安隊・自衛隊の前身である警察予備隊の創設が検討されているところであった。）

《ソ連と、革命に成功したばかりの中国の後ろ盾を得て、北朝鮮は韓国へ攻め込む。だが、金日成の見込みはあっけなく外れた。まずアメリカのトルーマン大統領が、北の武力進攻開始からわずか二日後に、米軍の出撃を命令。韓国においては、パルチザンの蜂

起など起こらなかった。当初、北は韓国軍を半島南端の釜山まで追い詰めたが、米軍の仁川上陸作戦によって中朝国境まで退却を強いられていく。》

50年9月29日 在平壤ソ連臨時代理大使→モスクワ

〔昨今の情勢は、ひどく紛糾してきた。(略)〕

ソウルは陥落した。38度線へと前進する敵に深刻な反撃を与えるだけの部隊は、準備されていない。北には、前線に向けて再編成されている部隊は存在するが、たいへんゆっくりとしか動いていない。なぜなら、鉄道駅や橋が破壊されたせいで、鉄道は、事実上何も機能しておらず、自動車輸送も滞っている。

〔編成された部隊には兵器も不足している。〕

50年9月29日 金日成→スターリン

〔親愛なるヨシフ・ヴィッサリオノヴィチ、われわれは貴下からの特別な支援を仰がずにはいられない。別の言葉でいえば、敵軍が38度線を越えた時には、われわれは、ソ連側からの直接的軍事的援助を大いに必要としている。〕

《だがソ連は、軍事などで支援は行なったものの、直接参戦に踏み切ることはなかった。》

50年10月13日 スターリン→金日成

〔抵抗の継続は展望がないとわれわれは考えている。中国の同志は、軍事介入を拒否している。〕

こうした状況においては、貴下は、中国あるいはソ連への全面的脱出の準備をしなければならない。〕

《この直後、毛沢東が中国人民志願軍の参戦を決定。やがて戦線は膠着状態に陥り、毛沢東と金日成は、停戦を望み始める。》

51年8月12日 毛沢東→スターリン

〔手元にある限られた資料によって国際情勢全般と、わが国の要望と、そして現在朝鮮は戦争を継続できないという事情を検討してみると、われわれはいま38度線のために闘争して会議を決裂させるよりも、現在の前線が走っているところで戦闘行動を停止することを考えた方がいいと考える。〕

《しかしスターリンは、戦争継続を主張。毛沢東とスターリンの間に軋轢が生じていく。》

53年3月29日 在平壤ソ連特別代表→モスクワ

〔北朝鮮指導者はさらに、「朝鮮戦争の終結と和平達成の主導権を取るべき時期が来た。これ以上戦争を長引かすことは、中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国の利益にも、全民主主義陣営の利益にもならない」と強調した。〕《停戦交渉は51年7月から始まっていたが、締結は53年3月のスターリンの死去を待たなければならなかった。》

モスクワ国際関係大学学長及び東洋学科教授である著者の A・V・トルクノフは、「ソ連も北朝鮮もアメリカも、誰もこの戦争に勝てると思っていなかった。停戦を一番喜んだのは、金日成だったはず。これらの資料からわかるのは、モスクワが平壤と北京を完全に操作していたという関係です。」と語り、「考えるべきことは、イデオロギーの問題

を話し合いでなく武力で解決しようとした結果、どれだけの民衆が苦しんだか、ということ。」と無益な朝鮮戦争について振り返っているが、北朝鮮にしても韓国にしてもその成り立ちからして、冷戦対立による地域分捕り合戦の結果の産物にほかならなかったもので、「話し合い」が双方に受け入れられる余地が彼ら自身にも、国際情勢的にも皆無であった。52年7月15日に毛沢東から金日成に宛てた電報の中に、「中朝人民は闘争の過程で力を蓄え、全世界の平和愛好人民の侵略戦争に反対する闘争、全世界の平和擁護の闘争を鼓舞している。アメリカ帝国主義の主要な軍事力を東方につなぎ止め、間断なき損失を与えている。その間、世界の平和の支柱であるソ連邦は、自己の建設を強化し、全世界人民の革命運動の発展に影響を与えることができる。それは新たな世界大戦を遅らせることになる。」というくだりが含まれているが、相も変わらぬ空疎で抽象的な宣伝文句がちりばめられており、この文面のどこに、朝鮮戦争によって「どれだけの民衆が苦しんだか、という」視点が底流しているだろう。毛沢東も金日成もスターリンも独裁者として自分たちの権力基盤を強固なものにし、拡大していくために奉仕させる「全世界の平和愛好人民」が奴隷のように抽象的に存在しているだけであった。

トルクノフは短いあとがきの中に、「朝鮮民主主義人民共和国の現在の惨めな姿こそ、朝鮮戦争の遺産の論理的帰結である。」と書いているが、当時北朝鮮の後ろ盾となっていたソ連は崩壊し、中国は「全世界人民の革命運動の発展」への影響力をかなぐり捨てて、自分たちのテーゼと背反する巨大資本主義国家の途を突っ走っている。また51年4月11日、朝鮮戦争の真っ最中にダグラス・マッカーサー国連軍最高司令官が解任されるという事態も起こった。前半の50年10月、朝鮮戦争に中国義勇軍が介入すると、戦争をあくまで朝鮮半島に局地化しようとするトルーマン大統領と、これを軟弱外交、敗北主義として批判し、中国の軍事基地への爆撃を主張、戦争を中国本土まで拡大しようとするマッカーサーとはことごとく対立してきた。4月6日、下院でマーティン共和党院内総務が、中国ばかりかソ連との全面戦争まで提唱するマッカーサーの書簡を読み上げたところ、トルーマンは激怒。6日後、ついにマッカーサーの解任に踏み切った。（註記 - マッカーサーは帰国後、「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」という言葉で有名な演説をし、その中で日本を子供に喩え、アメリカや西欧諸国が40歳くらいなら、日本はまだ12歳だといったので、彼の占領政策に恩義を感じていた日本人も、その演説にはいたくプライドを傷つけられ、マッカーサー人気も急激に下火になった。）

南北合わせて126万人の死者と、1千万人に及ぶ離散家族を生んだ朝鮮戦争は休戦協定が調印されて、分断が固定化されただけのことであった。どちらが先に発砲したのかはともかく、以上の資料によって、ソ連、中国を後ろ盾とする北朝鮮が統一を目指して南進を目論んだことは明白だとわかる。韓国は北進するだけの軍事的力量も後ろ盾も持たず、北の南進を食い止めるのに精一杯だったと推測される。当時は存在していなかった日本軍が南に加担することを警戒していたという資料を目にすると、北朝鮮の軍事行動によって日韓の協力関係ほど最大の障害物にほかならなかったことが窺われる。な

ぜ、日本人に偽装した北の工作員の手で大韓航空機爆破事件を惹き起こしてまで日韓対立を激化させなくてはならなかったのが、よくみえてくるにちがいない。

朝鮮半島の北も南も武力によって樹立された軍事政権にほかならなかったから、南北統一が軍事力によって決着を図られることは避けられなかった。だが朝鮮戦争の挫折は、軍事力による統一も東西冷戦の国際的環境の中では不可能であることを立証してみせた。そうすると、北も南も各々の同盟国に援助されながら、分断された状態の下で経済力を蓄え、各体制を強固なものにしていくほかなかった。東欧、ソ連の崩壊という冷戦終焉の構図は当然ながら、朝鮮半島で敵対している南北にまで、特に北朝鮮に深刻な影響をもたらさずにはおかなかった。南の韓国が軍事政権から脱して、アメリカの後ろ盾をもちはや必要としなくなるほどの安定した民主的な体制へと成長しつつあったのに対して、中ソの庇護の下で金父子による独裁体制の維持、強固に腐心してきた北朝鮮は冷戦時のような後ろ盾を中口から得られなくなることによって、経済的にも政治的にもますます追いつめられ、破綻を待つしかない金独裁体制を強固な軍事国家主義で延命させようとしているだけのことであった。

スターリン、毛沢東、金日成の機密電報を読み解いたトルクノフは『正論』（平成14年2月号）のインタビューで、「朝鮮戦争の収支決算」についてこう答えている。「一言でいうならば、朝鮮戦争はすべてに悪と罪をもたらしました。この戦争の勝利者はだれもないのです。みんなが損をしました。悪いことばかりをもたらした戦争でした。

中国は負けました。それで中国の周りにアメリカの基地ができ、長いこと中国は他の国から隔離されました。二つの朝鮮も負けました。多数の市民が血を流しました。北も南も勝ったとはいえません。アメリカ兵士もずいぶん戦死しました。アメリカだって負けました。ソビエトだって負けたのです。

朝鮮戦争を契機に世界は冷戦状態に入りました。だれもが損をしました。この戦いのために多額の資金を放出し、それぞれの国民経済の回復のために膨大な時間を要することになりました。ソ連も1980年代になってそのツケが回ってきて、あのような状態になってしまったのです。」

当事国は誰もが損をしたが、隣国の日本はどうであったのか。朝鮮戦争の勃発によって在日米軍が緊急出動し、日本国内の治安のために7万5千人からなる警察予備隊の新設と、海上保安庁保安官8千人の増員が指令され、52年に保安隊へ、54年に自衛隊へと改組拡充されていくことになった。経済的には日本がアメリカ軍を中心とする国連軍の基地となり、物資の調達や兵器の修理などが日本で行われることによって、アメリカの対日援助で埋められてきた戦後初期の日本の貿易赤字が、50年代前半には朝鮮特需で埋められるほどの景気をもたらした。世界的動乱ブームによる輸出の増加と特需は、日本経済がドッジ・ラインの実施に伴う不況を克服して成長の軌道に乗るきっかけになった。朝鮮半島を戦前植民地化し、戦後の南北分断に深いかわりをもっていた日本が

朝鮮戦争においても破顔一笑しているイメージがここに浮かび上がってくる。

さて南北統一を力で実現しようとした金日成を強気にしていたのは、おそらく一年前の中国革命の成功であり、更に1カ月前の5月30日の韓国総選挙で李承晩大統領の与党が敗北し、南北統一の気運が高まったことである。トルクノフもインタビューで答えているように、その頃、韓国のある共産党指導者が「もし北が進攻して来たら、50万の韓国労働者は北を支援する」という声明を出していたのを額面通りに受けとめて、「南の人々のなかには、北を支援したい人々がたくさんいるという思い込み」を膨らませていったが、もちろん、金日成の「大きな読み違い」であった。南の人々の全体的な支持が得られなかっただけでなく、米軍の素早い参戦も誤算であった。問題は北朝鮮が朝鮮戦争の敗北から何を学び取ったか、であった。北朝鮮の冷戦的思考は武力による南北統一の断念ではなく、より一層強大な武力を背景に対南工作を活発にする中での南北統一の推進にほかならなかった。

朝鮮戦争以降における北朝鮮の決定的で最大の誤算は、冷戦終焉という世界の枠組みが大きく変わってしまったことである。冷戦終焉は冷戦的思考の解消を促進し、北朝鮮の後盾であったロシアも中国も多くの矛盾に晒されながら、生き残っていくための柔軟な思考を取り入れようとしていたのに、北朝鮮だけは冷戦的思考のまま固まり、独り取り残されていくより仕方がなかった。というより、独裁体制の北朝鮮は冷戦の枠組みの中でしか存続しえなかったのであり、独裁体制を維持するかぎりには冷戦的思考が不可欠であったのだ。しかし、冷戦が解消した今、冷戦的思考はもはや不要であり、害悪ですらあった。冷戦をなお生き続けようとする北朝鮮にとって、冷戦時代に構想してきた対南、対日戦略を打ち捨てて新しく生きようとする事自体が不可能であった。

「よど号」グループにしても、日本人拉致事件にしても、大韓航空機爆破を初めとする数々の破壊工作事件にしても、また対南、対日攻撃・占領計画に沿った軍事演習にしても、すべて冷戦時代における冷戦的思考の産物であった。北朝鮮主導下の南北統一などもはやありえなかったように、「よど号」グループが工作する日本革命なども全く考えられなかった。だが、冷戦的思考の中でしか生き残ることができなくなっている北朝鮮の国家的テーマが、経済破綻を加速させる軍事中心主義体制を突出させざるをえなくなっている以上は、対日、対南工作に無限の夢をこめる以外にはなにもなくなっていたにちがいない。そのツケが全部北の人々に対する信じがたい飢えと貧困として現出しているのである。金日成が果たせなかった「白いコメのご飯に肉のスープ」という念願の人民への約束は、息子の代に至ってますます弾圧が強まる中、「白いコメのご飯に肉のスープ」を夢見て命懸けで脱北を試みる人民の流出というかたちで冷戦的思考を突き崩しているのだ。

2002年12月7日記

